

令和 5 年度

研究紀要



秋田県立由利高等学校

教育実践の成果をつなぐ

校 長 熊谷禎子

本校において研究紀要を作成する理由は、教員同士の情報共有や、教育実践の成果と課題を明確にすることにある。今年度は指導主事学校訪問が2回（5月、10月）あったが、そこでの取組や助言をあらためて確認することで、今後の授業改善における目指すべき方向性と授業構想を考える手がかりとしたい。実践的指導力向上研修と初任者研修の記録からは、今の学校現場で求められている「教育の力」（資質・能力）をリアルに追体験できるはずである。理数科や国際科の取組は、本校の特色ある教育活動であり、平成19年から継続してきた内容を多くの目で検証する場と捉えたい。

由利高校はいわゆる進路多様校と言える。進路先としては大学、短期大学、専門学校、就職であるが、いずれにおいても、各学年状況に応じて、生徒自らが目的や課題を見出し、学び、個に応じた成長を遂げている。今年度は教室での学びだけではなく、学校行事や部活動等、対面による様々な交流があった。学校の教育目標の「重点努力目標」は「生徒が自ら学ぼうとする授業づくりと生徒個々に対応した進路指導」であるが、生徒が自らに向き合うためには異なる言葉をもつ他者の存在は不可欠である。校長室へ面接指導のために来る生徒の大半が「世の中の役に立てるように頑張りたい」という言葉を口にするが、生徒自身が自らの生き方や在り方を考える上で、他者との関わりが原動力となっていることを実感した。

ここで（株）Gakken 高大事業部の大堀精一さんとのメールから、愛知教育大の学校教育科学専修（2023年度前期 出典：子安潤『画一化する授業からの自律』）小論課題文を紹介したい。課題文では、コロナ下で進んだオンライン授業に対して、そのプラス面を評価しつつ、根本的な課題を次のように指摘している。これからの授業構想を考える上で参考になると思う。

《（オンラインで送れるのは——引用者注）一般的にはパソコン上の言語記号や音声記号に事実上限定される。具体的に言えば、理料の再現実験はできないが、再現実験映像は送れるということである。ただ、ここで踏まえるべきは、再現実験と再現実験映像は大きく異なるということである。熱や臭いや本当の音などはわからない。それらの情報を通じて受け取るはずの感覚を人は知ることができない。（中略）学習者が直接モノや人に触れることは今後もオンライン授業ではできるようにはならない。オンライン参加の人が物事や人に働きかけて、そこからの応答を直接受け取ることはできるようにならない。私たち人間は、人やモノに働きかけることで働きかけ返されることを通じて学んでいく。この最も基本的なことがオンライン授業はできない。》また、昨年12月に伊勢崎高校「iTanQ“X”」の基調講演で上野千鶴子が生徒に向けて発した言葉が印象に残る。《学問は知の共有財産であるから、オリジナルの知を付け加えることを意識してほしい。オリジナルとはすでにあるものに対する違和感から生まれる。自分にとってのノイズから価値ある情報は生まれるのであって、あなたにとっての当たり前のことは情報にならない。同様に遠すぎる情報も情報にならない》である。近い将来において、情報を主体的に捉えながら、重要な情報を吟味し、取り出し、活用するとともに、他者と協働して新たな価値を創造していくためには、教科横断的な視点に立った探究的思考力を育成する日々の学習と、それを基盤とした情報活用能力が必要である。目の前にいる生徒に、各教科の「見方・考え方」を働かせた、主体的な学びの楽しさを実感させたい。

これからの社会で活躍できる由利高生に必要な「教育における次の一手」は、今までの教育活動にこそエビデンスが存在し、そこから様々な新たな学びのアイデアが生まれるはずである。研究紀要を手がかりに、これまでの教育実践をつなぎ、由利高校としての教育の充実を図りたい。

目 次

巻頭言

校 長 熊谷 禎子

1 令和 5 年度 授業改善の取組

- ・ 授業改善の取組
- ・ 指導主事学校訪問

教務部

2 研修報告

- 「実践的指導力向上研修講座（高等学校 8 年目）」
- 「実践的指導力習得研修講座（高等学校 3 年目）」
- 「初任者研修講座」
- 「初任者研修講座」

太田 聖矢
星野さくら
虻川 涼香
丸井 柊都

3 研究・実践記録

- 今年度理数科の取組
- ・ 高大連携事業について
- ・ 理数探究について

理数科運営委員会 工藤 卓哉

- 今年度国際科の取組
- ・ 主に現 2 年生を対象とした取組
- ・ 主に現 1 年生を対象とした取組
- ・ 次年度以降に向けて

国際科運営委員会 斎藤 孝輔

1 令和 5 年度 授業改善の取組

- 授業改善の取組
- 指導主事学校訪問

令和5年度 授業改善計画

秋田県立由利高等学校

(1) 令和5年度授業改善共通テーマ

主体性を育み、これからの社会に必要とされる思考力を伸ばす授業実践

①生徒が知る喜び・できる喜びを実感し、自ら新たな学びに向かうことができるような授業形態や教材の工夫

②生徒が「協働的」、「批判的」、「創造的」に思考できるような発問の工夫

③生徒が見通しをもって学習に取り組めるようになるための評価方法の改善

(2) テーマ設定の理由

①本校生徒における課題の1つである主体性の育成については継続して取り組んでいく必要がある。知る喜び・できる喜びを実感させることは主体性向上につながる。

②「協働的思考力」「批判的思考力」「創造的思考力」は今後社会の問題解決において求められる力であり、育成を図る必要がある。

③特に「主体的に学習に取り組む態度」の評価を、生徒の資質・能力や主体性を高めるための評価にしていく必要がある。

(3) 年間計画

5月 第1回指導主事訪問・・・2, 3校時授業参観

7月 第1回授業アンケート実施

第1回授業参観期間(7/4～7/21)

職員研修(主体的に学習に取り組む態度の評価方法について)

8月 第1回授業アンケート結果分析報告

10月 第2回授業参観期間(10/4～10/29)

第2回指導主事訪問・・・授業参観、研究授業、授業研修会

12月 第2回授業アンケート実施

1月 第2回授業アンケート結果分析報告

2月 学校評価、分掌評価会議

授業改善の年間総括、次年度計画策定

「協働的」、「批判的」、「創造的」な思考を促す「由利高型発問リスト」

（１）協働的思考力…相手を尊重し、自分と相手の共通点や違いを認め合いながら、自分の考えも伝えて議論を深めるための思考力

- ① 自分の考えと他の人の考えの共通点は？相違点は？
- ② 他の人も同じように考えるかな？
- ③ ○○の立場で考えるとどうなるかな？
- ④ 他の人との共通点や相違点が生まれる理由はなぜかな？
- ⑤ 自分のこととして捉えたとき、あなたならどうやって解決する？
- ⑥ 他の人の考えを聞いて、自分の考えは変わった？どう変わった？

（２）批判的思考力…情報を鵜呑みにせず、なぜか、本当にそうなのかと問いかけながら客観的かつ批判的な目線で物事を判断するための思考力

- ① なぜそう考えたの？そう考えた根拠は？
- ② その情報は正しい？情報の出所はどこ？
- ③ それは「事実」なの？「意見」なの？
- ④ 本当にそう言える？足りない情報はない？
- ⑤ それはつまりどういうことなのかな？
- ⑥ 筆者の意見に納得できる？

（３）創造的思考力…問題に直面したときに、別の切り口から考えたり他の事例を応用したアイデアを出したりして問題を解決するための思考力

- ① 他の単元や他の教科で習ったことを使えないかな？
- ② これらのことから何が言えるかな？
- ③ これらのことをまとめるとどういうこと？
- ④ それらを関連付けたとき、見えてくるものは何かな？
- ⑤ 以前に似たような状況はなかったかな？
- ⑥ 他の状態（別の状況）に当てはめてみると？

令和5年度教育委員会指導主事等の学校訪問 実施要項

秋田県立由利高等学校

1 訪問日

令和5年10月25日（水）

2 訪問者

高校教育課	指導主事	丹 啓 記（農 業）
高校教育課	指導主事	浅 野 朋 央（英 語）
保健体育課	指導主事	佐 藤 幸 彦（保健体育）

義務教育課	指導主事	八 田 浩 彦
中央教育事務所由利出張所	指導主事	熊 谷 亜希子

3 重点指導事項

（１）組織で取り組む魅力ある授業づくりの推進

- ・ねらいに基づいた授業構成
- ・生徒の思考を深める授業展開
- ・評価と検証を生かした授業改善

（２）「こころ 姿 振る舞い さわやか高校生運動」の推進による生徒指導の充実

- ・さわやかな整容
- ・さわやかな生活態度
- ・さわやかな学習環境

4 本校の学校訪問授業実践重点事項

生徒の深い学びにつながる授業構想と生徒の主体性を育てる評価の工夫

- ①授業の中での、「教師、級友、自分との対話」や「思考を促す発問」を通して、生徒自身が深く考える機会を設定する。
- ②ＩＣＴ機器を効率的に活用することで、生徒の学びを助け、整理する場とともに、振り返りの場を設定する。
- ③「主体的に学習に取り組む態度」の評価を重視することで、生徒の主体性を引き出す。

5 日程

3 校時 10:35～11:20 校長面談・・・場所：校長室

4 校時 11:30～12:15 表簿閲覧・・・場所：国際交流室

昼休み 12:15～12:55

5 校時 12:55～13:40 授業参観（p 3 授業一覧参照）

（研究授業対象クラス以外の生徒は5校時終了後放課）

6 校時 14:00～14:45 研究授業

教 科	授業者	科 目	対象クラス	場 所
理 科	太田 聖矢	理数生物	2 D	2 D 教室
英 語	丸井 柊都	英語コミュニケーション I	1 A	1 A 教室
保健体育	星野さくら	保健	2 A	2 A 教室

放課後 15:00～16:00 授業別分科会

理 科・・・場所：3 D 教室

英 語・・・場所：3 B 教室

保健体育・・・場所：3 E 教室

16:10～16:40 全体会・・・場所：会議室

6 分科会・全体会について

【分科会】進行：各教科主任

- ・授業者から本時の授業のねらい、**授業実践重点事項**との関連、感想等
- ・Jamboard を使用した協議・意見交換
- ・指導主事等から指導助言

【全体会】進行：教頭

- ・校長挨拶、指導主事等の紹介
- ・分科会報告
- ・指導主事より
- ・校長挨拶

理数科学習指導案（理数生物）

日 時 10月25日（月）6校時
 対象クラス 2年D組 14名
 場 所 2年D組教室
 指 導 者 太田 聖矢
 使用教科書 生物（数研出版）

1 単元名 第3章 代謝 呼吸

2 単元の目標

- ・呼吸について理解するとともに、それらの観察、実験などに関する技能を身に付ける。（知識・技能）
- ・観察、実験などを通して探究し、呼吸についての特徴を見いだして表現する。（思考・判断・表現）
- ・呼吸に関心を持ち、科学的に探究しようとする態度を養う。（主体的に学習に取り組む態度）

3 生徒と単元

（1）生徒観

理数生物選択者は男子3名、女子11名からなる。理系教科を得意とする生徒が多く、様々な自然現象に対して高い関心をもっている。また、タブレット端末を授業で利用しており、ICT機器を用いた学習に慣れている。自身の考えなどを他者に説明する力が不足しているため、ジグソー学習を行うことで、自分が学んだことを相手に分かりやすく表現する力を身に付けさせるとともに、協働的に課題を解決する力を身に付けさせたい。

（2）単元観

呼吸における各過程は、目に見えない複雑な反応が連続的に起きており、反応を実感させながら理解させることが難しい。したがって、図や化学式、生物用語などを用いて、目には見えない反応を表現することで、視覚的に説明する力を養う題材として扱える。

（3）指導観

生物基礎で呼吸の概要については学習しているので、詳しい仕組みについて図や化学式、生物用語などを用いて、視覚的に説明できるようにしたい。また、その仕組みを科学的に考えさせることで、呼吸とエネルギーについて理解を深めさせたい。その際、ICTを活用することで各々の考えを共有させながら言語活動を行い、科学的思考力を身に付けさせたい。

4 単元の指導と評価の計画（全9時間）

時	主たる学習活動	評 価 規 準		
		A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的な学習に取り組む態度
1	代謝とエネルギーについて理解する。	代謝の一部は酸化還元反応であり、大きなエネルギーの出入りを伴うことを理解している。		
2 ～ 4	呼吸の仕組みについて理解する。 (本時2/9)	糖のエネルギーが解糖系、クエン酸回路、電子伝達系と流れていき、ATPが合成されることを理解している。	解糖系、クエン酸回路、電子伝達系の反応から、呼吸全体の反応を適切に表現することができる。	呼吸について、学習した用語どうしのつながりを整理し、振り返ろうとしている。
5 ～ 6	発酵についての知識を身に付ける。	発酵について理解し、アルコール発酵の実験において、実験操作などの技能を身に付けている。	呼吸と発酵では、グルコース1分子から得られるATP量に大きな違いがある理由を説明することができる。	
7 ～ 9	光合成について理解する。	光化学系、電子伝達系、カルビン回路について理解している。	光合成を糖の合成に至るまでのエネルギーの流れとして関連付けて考察できる。	

5 本時の計画

(1) ねらい

呼吸について解糖系、クエン酸回路、電子伝達系のそれぞれの反応から、呼吸全体の反応を適切に表現することができる。
(思考・判断・表現)

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価 [方法]
導入 6分	- 生物基礎で学んだ呼吸について復習する。 - 本時の目標を確認する。 呼吸の反応を化学反応式で表すことができる。 - 本時の学習の手順を確認する。	- 呼吸の反応について確認する。 - 本時の目標を提示する。 - ジグソー活動を円滑に進めるために、エキスパート活動が重要であることを伝える。	
展開 35分	呼吸の反応を表しているのはどちらの反応式だろうか。 A : $C_6H_{12}O_6 + 6O_2 \rightarrow 6CO_2 + 6H_2O$ - 課題について個人の考えをまとめ、全体で意見を共有する。 - グループ（3～4人）から1人ずつ、①～③の各エキスパートグループに行き、エキスパート活動を行う。 ①解糖系 ②クエン酸回路 ③電子伝達系 - それぞれのエキスパート活動で学んだことを各グループに戻って、教え合い、ジグソー活動に取り組む。 - 全体で意見を共有し、呼吸の反応についてまとめる。	- 既習事項をもとに考えさせることで、課題に取り組む意欲を引き出す。 - Jamboard に記入させ、全体で考えを共有できるようにする。 ①～③について、それぞれの過程が行われる場所と、仕組みを各エキスパートに学習させ、Jamboard にまとめさせる。 - エキスパート活動で学んだことをグループに戻って教え合わせ、課題に取り組ませる。 - グループの考えを発表できるよう、Jamboard にまとめさせる。 - 電子黒板に投影し、各グループに発表させ、呼吸の反応について確認する。	[B] エキスパート活動で学んだことを正確に教えあい、グループ全体で呼吸の反応について適切に表現しているかをワークシートと発表で確認する。
整理 4分	本時を通して分かったことや疑問に感じたことについて振り返り、ワークシートに記入する。	個人で予想した内容とまとめを比較させ、呼吸の反応について理解を深めさせる。	

令和5年度教育委員会指導主事等の学校訪問 分科会記録

(教科：理科・生物)

司会（工藤）

(1) 授業者より

太田：「生徒に動いてもらいたい授業」を意識した。呼吸の仕組みについて、最後に生徒がわかってくるまでに時間がかかったので、前半でもう少しコンパクトに授業の構成を考えたらよかった。ICTの活用することで、生徒の学習に動きを持たせ、思考力を高めることができた。

(2) 研究協議

司会：ジャムボードで協議し発表

1班：

- ・全員が同じ活動では無くてそれぞれの役割があった。
- ・プリントの構成がいろいろなパーツを組み合わせている
- ・JAMボードの使い方が勉強になった。
- ・先生と生徒の関係が良い、日常的に雰囲気作りが出来ている。
- ・時間配分、グループ学習を行う上で導入に時間をかけてしまわないように
- ・指名しても特定の誰かわからないようにしている。
- ・教え合い活動、そのまま丸写ししない。
- ・Bの反応式は、何かもう少し興味を持たせても良かった。

2班：

- ・主体的に活動している生徒が多かった。
- ・少人数グループな事で一人一人が話し合いに参加し合っていた。
- ・クエン酸、電子伝達系統について理解できていたか。
- ・予想をもう少し共有できたら、なんとなく選んだ生徒も他の生徒と比較して納得できたかもしれない。
- ・エキスパート活動を最後までまとめるところまでがヤマ場だと思うので、そこでもっといろいろな意見が出て盛り上がったかもしれない。

3班：

- ・生徒が積極的に参加していた
- ・教師が一方的に教えない
- ・生徒によってできたり、出来なかったりする、ある程度差があっても粘り強くよく取り組んで考察していた。
- ・ICTの活用、情報の共有にはよかったが、入力や操作やハード面での時間のロスがあった。
- ・貼り付けるのに時間がかかったが、発表がスムーズにできていた。
- ・普段からよく鍛えられている（主体性：興味がある、知りたい）。
- ・ミスリードを含めて面白い授業だった

(3) 指導助言

高校教育課：丹 啓記 指導主事

農業が専門です。理数系の中では面白い科目だと思う。ジグソー法は中央高校でもやっており、流行している。今回の組み立ては非常に組織的な授業改善になるかもしれない。毎時間は厳しいが定期的にいれるのがいかもしれない。生徒の実態や既習事項の定着がわからなければ出来ない内容である。ホワイトボードを使用してもいい。学校全体で取り組んでみたらいいと思う。ICT3年目になり、学校の中で教科・単元との相性もわかってきている。主体的に考える習慣ができています。生徒の状況、タブレットの使い方にも差が出ている。ばらつきのある中で今日の授業では効果的だった。

司会：3つの重点事項に取り組んでくださった先生方ありがとうございました。

英語科学習指導案（英語コミュニケーションⅠ）

実施日時 令和5年10月25日（水）6校時

場 所 1年A組教室

対 象 1年A組

授 業 者 丸井 柊都、Wesley Sweet

教 科 書 CREATIVE English Communication I

（第一学習社）

1 単元名 Lesson 4 A Healthy Planet

2 単元の目標

- （１） 助動詞＋be＋過去分詞や It seems that・・・が用いられた英文を読んだり聞いたりして内容を理解することができる。 【知識及び技能】—A
- （２） 絶滅危惧種の保護のあり方について書かれた英語を読んだり聞いたりして得た情報をもとに、本文の内容に関連した自分の考えや心情を表現することができる。 【思考力、判断力、表現力等】—B
- （３） 本文の内容に関連した自分の考えや心情を相手に理解してもらえるよう工夫しようとしている。 【学びに向かう力、人間性等】—C

3 単元と関連する CAN-DO 形式での学習到達目標

- ・既習であれば、まとまった文量の英文を聞いて、内容を理解できる。 【聞くこと】
- ・教科書の英文の内容に関する T/F や他の質問に答えることができる。 【読むこと】
- ・身近な話題や本文の既習の内容について、質問されたことに答えることができる。 【話すこと(やりとり)】
- ・なじみのある話題について、自分の意見や感想を語句や単文を用いて、書いて伝えることができる。 【書くこと】

4 生徒と単元

（１）生徒観

男子13名、女子20名のクラスである。授業では教師の問いかけに対してよく反応し、特にペアワークでは活発に意見を交わすことができる。33名のうち英検準2級程度の生徒が数名、英検3級程度の生徒が大半だが、中には英検4級レベルの語彙や文法が分からない生徒も複数おり、大きな学力差がある。

（２）単元観

本単元では絶滅危惧種の保護のあり方について扱う。単純に種数を減らさないだけでなく、生態系の維持が人間にもたらす恩恵についても触れることで、本単元への理解を深めていく。教科書で得た情報を活用して、自分が保護したい自然を紹介したり、他者へ保護を訴える紹介文を作ったりする活動を通して、これからの人間の生活を自分たちでどのように守っていくか考える機会としたい。

5 単元計画（総時数10時間）

時	主たる学習活動
1	・新出単語を定着させる。

2～3	・パンダに関する提示とアナウンスを聞き取る。 ・本文を精読、音読する。
4～5	・絶滅危惧種を保護すべき理由について読み取る。 ・本文を精読、音読する。
6～7 (本時7/10)	・絶滅危惧種への募金活動について読み取る。 ・本文を精読、音読する。 ・保護を必要とする種の紹介文を書く。
8～9	・人間と自然環境の調和について読み取る ・本文の精読、音読、生態系から受けている恩恵について書く
10	・文法事項を定着させる。

6 評価規準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
助動詞+be+過去分詞、It seems that・・・について理解を深め、これらを適切に活用することができる。	教科書から得た情報やそれを踏まえた自分の意見を書いたり、話したりすることができる。	教科書から得た情報やそれを踏まえた自分の意見を、表現や伝え方を工夫して相手に伝えようとしている。

7 本時の計画（本時 7／10）

（１）ねらい

あまり寄付をされない絶滅危惧種について紹介し、保護の重要性を訴えることができる。

（２）展開

時間	学習活動	教師の支援及び留意点
導入 10 分	1. Greeting & Small talk 2. Review ・前時までで学習した内容に関する質問に答える。 ・教科書に関連した質問に答える。	・簡単な話題について生徒とやり取りをして、英語を学習する足場をつくる。 ・教科書を見て確認させる。 ・ALT とのやり取りで確認させる。
展開 32 分	3. Writing ・JTE と ALT のやり取りを聞く。 Goal: Unpopular animals への支援を訴える紹介文を書き、紹介することができ ・ワークシートに書かれている情報を紹介文として自分の言葉で書く。 ・グループで紹介し合い、代表の生徒を決める。 ・代表生徒がクラス全体に発表し、ALT と他の生徒がベストプレゼンターを決める。	・生徒に紹介文を書く必要性を感じさせる。 ・見本となる紹介文を提示する。 ・ワークシートに生徒が使える表現を載せる。 ・机間巡視をして生徒に支援する。 ・内容や表現にフィードバックをする。 【評価】 ワークシートの情報を活用して紹介文を書くことができる。（ワークシート） 【思考・判断・表現／主体的に学習に取り組む態度】
整理 3 分	4. Wrap-up ・振り返りを記入する。	・振り返りの視点を提示する。

(教科：英語)

※①②③は指導主事訪問授業実践重点事項に対応しています。

指導主事訪問授業実践重点事項

生徒の深い学びにつながる授業構想と生徒の主体性を育てる評価の工夫

- ①授業の中での、「教師、級友、自分との対話」や「思考を促す発問」を通して、生徒自身が深く考える機会を設定する。
- ②ICT機器を効率的に活用することで、生徒の学びを拡げ、整理する場とともに、振り返りの場を設定する。
- ③「主体的に学習に取り組む態度」の評価を重視することで、生徒の主体性を引き出す。

(1)授業者より

(丸井先生)

「絶滅危惧種について紹介文を書いてプレゼンテーションを行う」ことを本時の授業のねらいとした。プレゼンテーションを授業で行うことは初めてであったので、定型文に自分の考えを埋めていくという形を採用した。学校訪問授業実践重点事項において、①ReviewやIntroductionの中で生徒同士がやり取りをする中で英語を使う機会を確保できた。②Chromebookを活用してプレゼンテーションの内容を考えたり、自分の選んだ動物の写真をグループで見せながらプレゼンテーションを行うなど、ICT機器の効率的な使用を実践した。③毎時間の授業において、常に自分の英語を使ってアウトプットする機会を設けていて、その評価をワークシートに記録させている。

本時の授業において、物理的な時間が足りなくなってしまったために、各グループで代表者を選抜して、クラス内で発表することができなかった。しかし、生徒が英語のプレゼンテーションを体験するという目的を達成することはできたと感じている。

(Sweet先生)

今回のレッスンの内容は1年生にとっては比較的難しいものであったが、丸井先生がポイントをわかりやすく説明することによって、生徒は活動に積極的に取り組んでいた。生徒がプレゼンテーションを作成することはいい考えであった。

(2)研究協議

1班

「良かった点」

- ①既習の内容と結びつけて内容を考えさせた。
- ①導入部を中心に対話を引き出す時間と工夫が確保されていた。
- ②スライドの色分けや画像など目を引く工夫がされていた。
- ②画像やヒントの表現を手元で見ることができる。
- ②電子黒板と黒板の使い分けも工夫されていた。
- ③ワークシートの評価表の明示で生徒の主体性が引き出されていた。

「課題・改善点」

- ①内容とプレゼンテーションのどちらかに焦点を当てたほうが良かった。
- ①1人の生徒が分からない英語を全体で共有する必要があった。
- ③生徒が本当に「伝えたい」と思える内容の工夫、相手を説得する工夫。

2 班

「良かった点」

- ①Small talk のやり取りで生徒が自由に答える雰囲気がある。
- ①代表生徒のプレゼンテーションの内容・表現ともに良かった。
- ②文構造などを提示する際に ICT 機器は便利だと感じた。
- ②Classroom の活用は効果的で良かった。
- ③本時の課題（英語での紹介文作成）に対する個々の取り組みが良かった。

「課題・改善点」

- ①考える時間とプレゼンテーションを行う時間のバランスが難しかった。
- ①自分の使う英語を理解して話しているのか、理解して聞いているのか未知のままお互いを褒め合う空間に違和感を感じている生徒の比率も未知のまま。何かの基準になるものが欲しかった。
- ②ICT が効果的な場面と従来型の紙媒体によるまとめや板書の使い分けが必要。
- ③プレゼン評価の説明がよく伝わらなかったために戸惑う生徒が多かった。

3 班

「良かった点」

- ①プレゼンまでの流れが自然で、適切なレベルの課題や足掛けであった。
- ①生徒の主体性を引き出すための教師の呼びかけがよかった。

「課題・改善点」

- ①オリジナリティをどうやって引き出すのかが課題。他の人を説得する形だとオリジナリティを引き出せるのではないか。活動時間の配分も難しいところ。
- ③まとまった英文を表現する方法を身に付けさせること。

(3) 指導助言

（高校教育課 浅野朋央指導主事）

プレゼンを作成している生徒が ALT 先生に聞いたり生徒同士で確認したりして、生徒の主体性を引き出すことができていた点で、今回の授業は成功だったと言える。

「良かった点」

- ・クラスの雰囲気が良く、生徒を褒めることによって生徒との信頼関係が築けている。
- ・生徒同士のペアワークを多く取り入れることで対話的な学びにつながっている。
- ・モデル文を提示することが有効的であった。

「課題・改善点」

- ・プレゼンの良い例と悪い例を見せて、生徒に気づかせることが必要であった。
- ・自分の考えを共有する場面がもっとあれば良かった。
- ・何人かの生徒がわからない表現を全体にフィードバックする必要があった。
- ・グループでのプレゼンに対する質問があれば、双方向の意識が生まれる。

保健体育科学習指導案（保健）

日 時 10月25日（水）6校時
対象クラス 2年A組 35名
場 所 2年A組教室
指 導 者 星野 さくら
使用教科書 現代高等保健体育
(116～117 ページ)

1 単元名

(4) 健康を支える環境づくり (ウ) 保健・医療制度及び地域の保健・医療機関

2 単元の目標

- (1) 健康の保持増進には、保健・医療制度や地域の保健所、保健センター、医療機関などを適切に利用することが必要であること、医薬品は、有効性や安全性が審査されており、販売には制限があること、疾病からの回復や悪化の防止には、医薬品を正しく使用することが有効であることについて理解することができるようにする。(知識)
- (2) 健康を支える環境づくりに関する情報から課題を発見し、疾病等のリスクの軽減、生活の質の向上、健康を支える環境づくりなどと、解決方法を関連付けて考え、適切な整備や活用方法を選択し、それらを説明できるようにする。(思考力、判断力、表現力等)
- (3) 保健・医療制度及び地域の保健・医療機関の活用について、自他や社会の課題の解決方法及び適切な活用方法の選択に向けての話し合いや意見の交換などに主体的に取り組もうとしている。(学びに向かう力、人間性等)

3 生徒と単元

(1) 生徒観

保健体育科に関する知識や技能については十分に身に付いている生徒とそうでない生徒がいるが、興味・関心をもって取り組む生徒が多い。これまで、乳幼児期から高齢期にかけての各ライフステージにおける健康課題について学んできており、地域で提供されている保健サービスとの関連を図ることができると思う。保健の授業中はおとなしい印象であるが課題について考えたり、調べたりする活動に積極的に取り組んでいる。個人での取組をグループに共有することに課題があるため、活発な意見交換ができる雰囲気を作っていきたい。

(2) 単元観

この単元は、保健・医療制度や地域の保健・医療機関の活用に関する方法や、医薬品は有効性や安全性が審査され、正しく利用することが有効であることなどを中心に構成された単元である。身近な生活に溢れている情報に目を向け、保健サービスの活用方法について考える学習活動に生かしたい。

(3) 指導観

身の周りには様々な健康情報が溢れているが、高校生にとってはまだ関心の低い内容であることが多いため、見逃されがちである。本時では、全国各地域の広報から健康情報を抜き取り、地域で提供されている保健・医療サービスへの関心を高めていく。また、収集した情報を活用し、由利本荘市と比較し地域の健康課題の解決について考えることで、健康の保持増進につながる思考力・判断力・表現力を高めたい。

4 単元の指導と評価の計画（全5時間）

時	主たる学習活動	評価基準（評価方法）		
		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
1	- 保健・医療制度や保健・医療サービスなどについて理解する。 - 保健機関、医療機関、保健・医療サービスなどを適切に活用していくなどが必要であることについて理解する。 - 由利本荘市の保健・医療サービスについて調べる。	①（ワークシート） ②（観察・ワークシート）		
②	地域の保健・医療機関やスポーツ施設の活用の仕方について、地域の広報の情報などを整理し、地域の健康課題の解決について考える。（本時）		①（Google スプレッドシート）	①（観察）
3	医薬品は三つに大別され、承認制度によってその有効性や安全性が審査され、販売に規制が設けられていることについて理解する。	③（ワークシート）		
4	医薬品の使用法を守り、正しく使うことが必要であることについて理解する。	④（ワークシート）		
5	医薬品の制度とその活用について生活の質の向上のために利用の仕方を整理している。		②（Google スプレッドシート）	①（総括）

5 単元の評価基準

A 知識・技能	B 思考・判断・表現	C 主体的に学習に取り組む態度
①我が国には、人々の健康を支えるための保健・医療制度が存在し、行政及びその他の機関などから健康に関する情報、医療の供給、医療費の保障も含めた保健・医療サービスなどが提供されていることについて理解したことを言ったり書いたりしている。 ②健康を保持増進するためには、検診などを通して自己の健康上の課題を的確に把握し、地域の保健所や保健センターなどの保健機関、病院や診療所などの医療機関、及び保健・医療サービスなどを適切に活用していくなどが必要であることについて理解したことを言ったり書いたりしている。 ③医薬品は、医療用医薬品、要指導医薬品、一般用医薬品の三つに大別され、承認制度によってその有効性や安全性が審査されており、販売に規制が設けられていることについて理解したことを言ったり書いたりしている。 ④疾病からの回復や悪化の防止には、個々の医薬品の特性を理解した上で使用法についての注意を守り、正しく使うことが必要であることについて理解したことを言ったり書いたりしている。	①地域の保健・医療機関やスポーツ施設の活用の仕方について、関連した情報を整理し、生活の質の向上に向けた自他や社会の課題解決に応用している。 ②医薬品の制度とその活用について医薬品には承認制度があり、販売に規制が設けられていることと関連付けながら、生活の質の向上のために利用の仕方を整理している。	①保健・医療制度及び地域の保健・医療機関の活用について、課題の解決に向けての話し合いや意見交換などの学習活動に主体的に取り組もうとしている。

6 本時の計画

(1) ねらい

地域の保健・医療機関やスポーツ施設の活用の仕方について、広報の情報などを整理し、地域の健康課題の解決に応用することができるようにする。(思考力、判断力、表現力等)

(2) 展開

時間	学習活動	指導上の留意点	評価 [方法]
導入 (5分)	1 前時を振り返り、学んだことを確認する。 ・前回まとめた由利本荘市の保健・医療サービスの内容を見直す。	前時で学習した内容を想起できるようキーワードを取り上げて説明する。	
展開 (35分)	2 本時の目標を確認する。 全国各地域の広報から健康情報を整理し、由利本荘市の健康課題の解決について考えてみよう。 3 広報から健康情報を抜き取る。 (4人グループ) ・各グループに振り分けられた地域の広報から情報を抜き取る。 (沖縄県那覇、北海道旭川市、東京都港区) ・4人グループで共有した Google スプレッドシートに抜き取った情報を記入し、クラス全体に概要を発表する。 4 由利本荘市と他地区の保健・医療サービスを比較する。 ・由利本荘市の良い取組と改善点について話し合う。 ・由利本荘市の健康課題の解決策についてグループの意見をクラス全体に発表する。	・広報に掲載されている多くの情報から、項目を絞って健康情報を抜き出せるよう促す。 (検診、感染症、高齢者、健康運動教室、メンタルヘルス、母子保健、その他) ・既習の内容である、ライフステージにおける健康課題の例を提示する。 ・発表を聞き、他グループとの類似点や新たな気づきを発見できるよう促す。	[B] ・地域の保健・医療機関やスポーツ施設の活用の仕方について、広報の情報を整理し、健康課題の解決に応用しているかを Google スプレッドシートで確認する。
整理 (5分)	5 本時のまとめをする。 ・Google スプレッドシートに本時の振り返りを記入する。	・本時の学習内容を振り返り、次時の学習につなげられるようにする。	

(教科：保健体育)

(1) 授業者より

- ・ワークシートを活用し学習活動がスムーズに進むように工夫した。
- ・生徒同士の話し合いや協力する姿勢は積極的であった。
- ・タブレットと電子黒板を活用したがペーパーよりも情報共有しやすい。
- ・教材の難易度が高く理解できるか不安があったが良く取り組んでいた。

(2) 研究協議

- ・目標設定が明確で授業内容が理解しやすかった。
- ・ICT を活用して班同士が情報共有している。(効果あり)
- ・ワークシートの活用が効果的であった。
- ・教材研究が熱心であり選んだ教材が的確であった。
- ・スタート・ゴールという言葉使いが理解しやすい。(今日のゴールは〇〇まで～)
- ・発表者の声量の指導必要。

(3) 指導助言

(佐藤幸彦指導主事)

- ・様々な地域(東中西地区)に目を向けさせ比較させる。(興味関心◎)
- ・ICT を利用しての振り返りは効果あり。
- ・高校 2 年生は保健の授業が最後になる。自分自身の健康維持のため地域や社会に目を向けさせる授業は大切である。
- ・ICT を活用した授業を積極的に取り入れてほしい。

令和5年度教育委員会指導主事等の学校訪問 全体会議事録

令和5年10月25日（水）

16：10～16：40

於 由利高校会議室

1 校長挨拶、指導主事等の紹介

本日参加の3名の指導主事の先生方には忌憚のないご意見・ご助言をお願いいたします。

2 分科会報告

理科 呼吸の仕組みをジャムボードを用いて表現させる、ジグソー法を用いた授業。生徒が主体的に動き、各グループとのコミュニケーションもとれていた。一方で内容が少し多く、時間内に収まりきらなかった部分もあるが、3つの重点事項をよく押さえていた。生徒のICT活用には、個人差が見られた。

英語 絶滅危惧種の中でも特に好まれない動物の支援をするための紹介文の作成。生徒が授業内で主体的に英語を使う機会を増やそうと心がけた授業内容となっており、雰囲気も良い。紹介文の内容を班内で共通するところまでは進んだが、時間が足りずに各班代表の発表まではいかなかった。今後の課題として、生徒の発表後、それに対して他の生徒が自発的に質問したりするような場面があれば良かった。

保健体育 地域の健康課題の解決について、広報誌4紙を用いて各地区を比較。スプレッドシートを活用して、読み取った内容を各班で発表。授業者の目標設定から到達地点までの全体の流れが良く、たいへんすばらしい授業であった。指導主事からも、生徒の興味・関心を引く教材の選択が良かったとの評価をいただいた。一方、作業時に生徒が文字を入力するときグループ内での会話が少なくなる傾向があり、その点が課題といえる。

3 指導主事より

保健体育課 佐藤 幸彦 指導主事

①学校教育・部活動について

コロナ下で生徒の運動時間・運動習慣化について減少傾向が危惧されてきた。学校においては体育の授業だけでなく各教育活動を通じて、生徒のスポーツライフを指導する機会を設けてほしい。部活動についても、教室では得られない貴重な体験ができる場ととらえ、事故対策を徹底し、生徒が安全に活動できる配慮を行ってほしい。勝利一辺倒・技術偏重ではなく、生徒の内面の成長が図られているかという点も念頭に置きながら指導していただきたい。

②健康教育・食育について

ライフスタイル調査の結果、睡眠不足、朝食を欠く生徒の率が全国平均よりも多く出ている。心身ともに健康的な生活を送るための指導を行う機会も高校時代が最後である。

③学校安全について

- 1) 交通事故の未然防止について …… 生徒の命を守る指導を
- 2) 不審者の学校侵入対策について … 緊急時の報告体制の整備を
- 3) 災害発生時の安全確保について … 危機管理マニュアルを活用・改善を
- 4) 熱中症対策について

高校教育課 丹 啓記 指導主事

① 諸表簿に関することについて

指導要録を含む諸表簿を確認した。今年度は校務支援システムへの移行に伴い、ご難儀をおかけするが、全体的によく整理されている。指導要録では、生徒の所見欄に一人ひとりの優れている点や成長の記録も丁寧に記載されていた。改善すべき点としては、総合的な探究の時間の評価について、クラスによっては表現が限られていた。生徒の学習状況やどのような力を身につけたかなど一人ひとりの評価を丁寧に言い、画一的なものにならないようにしてほしい。

②生徒指導について

1) 実践重点事項について

実践重点事項①の取り組みは、教師と生徒の人間的なふれあいを基盤に、生徒一人ひとりに自己肯定感を促す機会となる。本日の授業でもペアワーク、グループワークを通じて自分の意見を他人の前で話し、周りに認められるという経験が自己肯定感につながると感じた。

2) いじめの対応について

生徒から被害の申し出があった場合、教員の初期対応が重要である。被害生徒の状況をこじらせさせないように、一部の教員だけではなく組織的な対応を。いじめ対応の研修材料として、フローチャートを利用している点は、他校に対しても参考になる取り組みである。

高校教育課 浅野 朋央 指導主事

① 今年度の指導主事訪問について

前回同様、教室内の整理整頓が行き届いており、落ち着いた雰囲気の中、どの生徒もしっかり前を向いて真剣に、熱心に授業に臨んでいた。学習内容を理解させ、身につけさせたいという教師の熱意が伝わってくる授業が多かった。教師と生徒との間に信頼関係が成り立っており、ともに学ぶ場を作り上げていく雰囲気が感じられた。

② 授業改善について

前回、生徒同士のペアワークにおいて、既習事項やそれに関連付けた自分の意見や思い、考えを表現したりするような場面が少ないように感じた。そのような現状を踏まえて、生徒の深い学びにつながる授業構想と、生徒の主体性を育てる評価の工夫をし、さまざまな対話と思考を促す発問、ICTの効果的活用、主体的に学習に取り組む態度の評価と充実を手立てとして取り組んでいただいた。

1) 主体的に学習に取り組む態度について

生徒が主体的に学習に取り組むためには、学習内容に興味・関心を持ち、粘り強く学習に取り組むこととともに、見通しを持って学び、学習を振り返りながら自分の学習を調整していくことが必要となる。今回参観した多くの授業で本時の目標の提示、学習内容の振り返りが行われており、生徒との共有化が図られていた。生徒に学びの見通しを持たせることで、学んだことを次の学習にもつなげられるため、継続して実施してもらいたい。

2) 対話について

ペアやグループでの学習や話し合いの場で、学んだことや自らの経験を活かしながら、自分の思いや意見を言葉にして他のメンバーと意見を交わすことは、生徒が自分の考えを深めたり確認したりするのに有効である。今回参観した授業では、対話の場面が適切かつ効果的に設定されており、これも継続して実施してもらいたい。

3) 深い学びについて

どれだけ主体的・対話的であっても、そこに深い学びがなければ真の学びとはならない。深い学びのためには習得した知識や学んだことを活用・発揮する場面が必要となる。そこで知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたりして深い学びとなる。

4) 発問について

その発問で生徒の思考を促すためには、一問一答や考えが限定される問いに加えて、考えが一つではなく、生徒の自由な発想や考えが引き出されるような問いをすることが重要となる。また、生徒の発問に対して先生が適切にフィードバックすることも大切である。生徒の意見や考えを教師が全体に共有する場面を適切に設け、それに対してコメントを加えたり、しっかり褒めたりすることは生徒の自信をつけてより主体的に発言する力の育成にもつながる。深い学びの中で生徒の主体性を引き出し、思考力・判断力・表現力を育成するためにも思考を促す発問を投げかけるとともに、授業に自己表現・意見交流の機会を充実させていただきたい。

4 校長挨拶

本日はお忙しいところ、本校の授業を参観いただきありがとうございました。今回、さまざまな視点からご指導とご助言を賜り、そのことを生徒にとっての主体的・対話的で深い学びに活かしていけるように由利高校の教職員全員で工夫と改善を図っていきたい。生徒の資質・能力を育てるためには、教師も変化に柔軟に対応し、教師自身も行動できる力が必要だと感じる。新たな挑戦がなければ新たな世界を知ることができないので、これまでの取り組みの成果と課題にしっかりと向き合い、学校を一つのチームとして進んで行きたいと思う。

2 研修報告

- 「実践の指導力向上研修講座（高等学校8年目）」
- 「実践の指導力習得研修講座（高等学校3年目）」
- 「初任者研修講座」
- 「初任者研修講座」

「実践的指導力向上研修講座（高等学校8年目）」を受講して

期 日 : <Ⅰ期>令和5年6月23日(金)
<Ⅱ期>令和5年8月 8日(火)
場 所 : 秋田県総合教育センター
氏 名 : 太田 聖矢

1 研修の目標

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

2 受講内容

Ⅰ 期

10:00～10:15	開講行事
10:15～11:55	〈講義・演習〉不登校の未然防止と対応
11:55～12:55	昼食：休憩
12:55～13:05	〈説明〉社会に開かれた教育課程の実現に向けて
13:10～14:10	〈講義・演習〉学校組織の一員として ―自己理解に基づく目標設定―
14:20～16:05	〈講義・演習〉カリキュラムマネジメント

Ⅱ 期

10:00～15:15	〈演習・協議〉カリキュラムマネジメントを軸にした授業改善
15:25～16:15	〈振り返り〉

3 受講のまとめ

今回の研修を通して、学校教育目標を達成するために自分自身がどう関わっていくかを考えなければいけないと強く考えさせられた。秋田県教職キャリア指標の第2ステージの後半を迎え、今まで以上に学校組織の運営に積極的に関わる事が求められている。学校組織の一員として教育目標を達成するために、課題や教育資源の把握、自己理解が重要である。その点で、今回の研修で行った資質・力量マップの作成や学校「よさ」と「課題」をさぐるワークは、自身の現状や由利高校の特徴を改めて確認する良い機会となった。

Ⅱ期の研修は、Ⅰ期で学んだカリキュラム・マネジメントの視点を踏まえた授業改善ということで取り組んだ、学習指導案と授業を撮影したDVDをもとに、ねらいを達成するための手立ての有効性と課題について協議する教科指導研修であった。他教科（体育、音楽）の先生方との研修だったので、様々な視点から協議することができ有意義な研修となった。学校目標の達成に向けた教科指導において、学校課題の把握、資源の活用を常に検証しながら、授業改善を進めていくためには、教員間の横のつながりが重要だと感じたので、同じ教科だけではなく学校全体で取り組んでいきたい。

これまで以上に学校組織の一員として、学校目標を達成するために、自身の能力をどう生かしていけるのかを広い視点から捉え、実行していかなければいけないと一層の責任を感じた。PDCAを適切に展開していくために、“C”から始めることを意識して今後の授業改善や学校業務に取り入れていきたい。

令和5年度

「実践的指導力習得研修（採用3年目研修）」を受講して

氏 名：星野 さくら

研修の目標

- ・新課程に合わせた授業展開と観点別評価を行い、生徒が主体的に授業に取り組めるよう工夫する。
- ・2年生の担任として、生徒が自らの進路について明確な見通しを持てるように支援する。

受講内容

- ・学級づくりの進め方
- ・保護者面談の進め方
- ・生徒面談と進路指導
- ・特別な支援を要する生徒の理解と支援
- ・研修授業（保健）

受講のまとめ

本県教員採用3年目となった今年度は、実践的指導力習得研修として校内研修を行った。教科の指導では、生徒が主体的に授業に取り組むことができるよう日々の教材研究・授業改善に時間を費やし、研究授業を行い、たくさんの助言を頂いた。また学級経営については、生徒理解や進路指導、保護者面談の進め方などを学び実践に生かした。

授業改善として特に保健の授業に力を入れた。これまでは講義型で生徒にとっては受け身の授業が多かったが、今年は生徒が課題や問題点について考え、自分なりの答えを導く授業に変換することができた。生徒のタブレットを有効に活用し、レポート作成やグループ協議に利用した。調べ学習だけでなく、意見の共有や考えを発展させる手立てとして使うことができた。特に研究授業では、ICTを利用したワークシートの活用が効果的であった、教材研究が熱心であり選んだ教材が的確であったという成果の声をいただいた。また、それぞれがタブレット入力作業に夢中になって会話が少なくなったなどの改善点も見つかり、授業内での活動のメリハリをつけることが課題となった。来年度は体育でのICT機器の活用・授業改善にも力を入れていきたい。

「いつも通り」の変化のない日は1日も無かったと感じる。毎日何か出来事があり、それが新鮮で学びの場であり、日々研修だという意識を持って過ごした。生徒から学ぶこと、授業を振り返って学ぶこと、会議や分掌の仕事を通して先輩の先生方から学ぶことが多く、自身の成長につながり充実した3年目だったと感じる。今後も絶えず研修と修養に努め、本県・本校の教育の発展に尽力していきたい。

「初任者研修講座」を受講して

氏名： 虻川 涼香

1 はじめに

今年度の初任者研修は、新型コロナウイルスが五類に移行し、PA研修など実際に体験する活動ができたり、様々な先生方とコミュニケーションを取ったりしながら学ぶことができた。教諭として新しい一歩を踏み出すために大変貴重な経験を得ることができた。

2 校外研修

(1) 総合教育センター研修

総合教育センター主催の初任者研修講座は、I期からX期までの合計10回開催された。その中でも秋田大学附属病院の先生からお話を伺ったことや中学校の先生方と合同で授業検討を行うなど、普段の学校生活では聞けないような、現場の話を聞くことができ、自分の知見を広げることができた。また、研修の中では「授業づくりについて」「いじめ等の問題行動や不登校の理解」「キャリア教育」「特別な支援を要する児童生徒への理解」など教員として必要な知識や技術を身に付けることができた。特に学校ごとで研究授業を行った講座Ⅷでは、生徒に身に付けさせたい力を決め、そこから授業を構成していくという基本的な授業の在り方の大切さを改めて実感することができた。たくさんの先生にご協力をいただき、授業に足りない部分や改善策など自分の授業を正しく見つめなおすことができた。

(2) PA研修

7月25日に岩城少年自然の家で行った。このPA研修を通して学んだことは、身体を動かして実際にやってみることの楽しさと楽しい活動にするためには見通しを明確に定める必要があるということだ。沢山のひとと身体を動かして体験することはとても楽しく、充実した時間になった。この「実際にやってみる」ことは普段の授業構想にも取り入れたい視点だと思う。生徒自身が自らの疑問を解決するために、周囲と協力しながら試行錯誤し、「実際にやってみる」という主体的に活動する授業が必要であると今回の研修から改めて感じた。また、生徒が楽しむ授業のためには明確な見通しを設定する必要がある。実際PA活動の中でも、講師の先生方が明確に見通しを示してくれたおかげで全員が一つの目標に向かい、安心して活動に取り組むことができた。生徒が自由に楽しむためには教員が生徒は何を目指して、どのように取り組んで行くのかという見通しを示す必要があると学んだ。

(3) 特別支援学校訪問

秋田県立ゆり支援学校に訪問し、学校経営について聞き、授業参観をし、高等部の授業体験をした。また、教育専門監からお話を伺ったり、質問をしたりした。一日を通じて、生徒一人一人を見つめることの大切さを学んだ。特に授業参観や授業体験での支援学校の先生方の姿が印象に残っている。生徒ができないことにも粘り強く声掛けをして、できるようになったことには一緒に喜んでいく。また、高等部の体験活動では私が1つの作品を作るうちに、生徒は5つくらいの綺麗な作品を完成させていた。その際に、支援学校の先生から「生徒それぞれでできること、できないことは異なっている。できることを見つけてあげるのが私たちの仕事」と教えていただいた。様々な生徒への対応を求められる時代だからこそ、教員自身が余裕を持ち、一人一人を見つめて信頼関係を築いていくことが大切なのだとこの実習を通して学ぶことができた。

(4) 学校訪問

秋田県立明德館高校に訪問して定時制や通信制に通う生徒が日々の生活について振り返る発表会に参加し、また授業を参観したり校長先生の講話を聞いたりした。生活体験発表会を聞いて、「定時制に来て素敵な友達と出会えた」「どうせならやりたいことを全部やってみようと頑張った」と夢や希望を抱いている生徒が沢山おり全日制の学校だけが生徒が輝ける場所ではないのだと強く感じた。また、授業を参観して、グループ活動など生徒同士の関わりが少ないと感じた。その代わりに先生対生徒の関わりが多く、どの生徒も与えられた課題に集中して取り組む姿が印象的であった。

3 校内研修

教科外のことを学ぶ一般研修と、教科のことを学ぶ教科研修を行った。

一般研修では、管理職の先生方や各分掌の主任の先生方に多くの御協力をいただき、日頃の業務の進め方だけではなく、進路指導や特別活動、生徒指導などの様々な本校の特色についても学ぶことのできる機会を用意していただいた。どの先生方も自分の仕事に誇りを持って働いているのだと実感した。研修を通して、教員には様々な力が求められていることを改めて理解するとともに、自分の力量不足を痛感した。今回の一般研修で学んだことを忘れずに、様々なことに挑戦して教員としての力量を高められるように努めていきたいと感じた。

教科研修では、教科指導員として日々御指導してくださった渡辺吉幸先生をはじめとして、国語科の先生方から御協力・御指導いただいた。また、他教科の先生の授業も参観させていただき、ICT機器の活用や、授業で生徒が自ら考える姿を自分の目で見ることができ、多くの学びを得ることができた。特に単元計画や指導案を作ることにより、生徒に身に付けさせたい力、単元終了後の生徒のイメージを持ちながら、単元計画や授業を作っていかなければならないのだと再確認することができた。日々の忙しさの中で、簡単にグループ活動にしたり、よく考えもせずにICTを使ったりすることがあるが、それは本当に必要なかどうかをよく考えながら、有効に使っていかなければならないと思う。また、評価についても生徒の学びの過程を理解し、どのように成長したのかを反映させなければならないのだと分かった。新学習指導要領の新しい評価にまだ戸惑いはあるが、生徒の成長を正しく評価できるように改善し続けなければならないと感じた。

4 おわりに

研修担当の野澤幸子先生、教科指導員の渡辺吉幸先生をはじめ、本当に多くの先生方の御理解・御支援のもとで、1年間の初任者研修を終えることができた。心から感謝申し上げます。

予測不可能な時代を生き抜いていく生徒を育てるためには、まずは私たち教員が新しいことを恐れずに学んでいく必要がある。初任者研修は終わりになるが、これからも学び続ける姿勢を忘れずに、自分の教員としての力量の向上に努めていきたい。

「初任者研修講座（高等学校）」を受講して

氏 名 : 丸井柊都

研修の目標

教員としての心構えを身につけるとともに、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての基礎的・基本的な指導力を養う。

受講内容

【総合教育センター主催】

- ・初任者研修講座：教科等指導力、マネジメント能力、生徒指導力、教育課題への対応

【高校教育課主催】

- ・PA研修：プロジェクトアドベンチャー体験、協議
- ・授業研修（秋田明德館高等学校）：授業参観、秋田明德館高等学校長講話
- ・特別支援学校訪問：授業参観、授業体験、教育専門監講話

受講のまとめ

初任者研修講座ではⅠ期からⅩ期までの総合教育センター主催の研修の中で、講義や演習を通して教員としての基礎的・基本的な指導力を多岐にわたって養うことができた。また、PA研修をはじめ、高校教育課主催の研修では体験的な研修を数多く用意していただいた。加えて校内研修では、本校の先生方にご協力をいただき、本校の特色ある学校経営やクラス経営についても学ぶことができた。

総合教育センター主催のⅩ期ではホームルーム経営における重点事項を学習した。学級全体をまとめ上げることや、個々の生徒が安心できる居場所作りをすることなど、来年度から担任を持つ上での心構えができる研修であった。Ⅵ、Ⅶ期では中学校との合同研修や他の初任者との協議を通して、学習指導要領に基づいた教科指導について考えを深めることができた。また、Ⅷ期で行った授業実践研修では総合教育センターの菅原指導主事や本校の英語科教員から多くの意見を頂戴し、今後のさらなる授業改善に役立てることができた。

校内研修では管理職の先生方をはじめ、本校教員の方々から日頃の業務遂行において必要な知識や技能を学ぶことができた。特に、教務に関する研修は日々の出欠や成績処理など今後必ず扱う事柄ばかりであり、これからも実践を通して、理解を深めていきたい。また、生徒指導や特別活動では、学習指導要領上でのねらいや実際の職員の動きなど、研修を通して新しく得た知識も多くあった。各分掌の働きによって学校ならではの特色が目立っており、本研修で扱った内容を理解することで、個人としても学校経営に役立っていけることが分かった。来年度はさらに積極的な姿勢で研修を受けていきたい。

最後に、本研修を受けるに当たって、管理職の先生方をはじめ、指導教官の中村宏紀先生や各主任の先生方からご協力をいただいた。心から感謝申し上げますとともに、今後さらに自己研鑽に努めていきたい。

3 研究・実践記録

今年度理数科の取組

- ・ 高大連携事業について
- ・ 理数探究について

今年度国際科の取組

- ・ 主に現2年生を対象とした取組
- ・ 主に現1年生を対象とした取組
- ・ 次年度に向けて

令和5年度理数科活動報告

理数科運営委員会主任 工藤 卓哉

1. 高大連携事業について

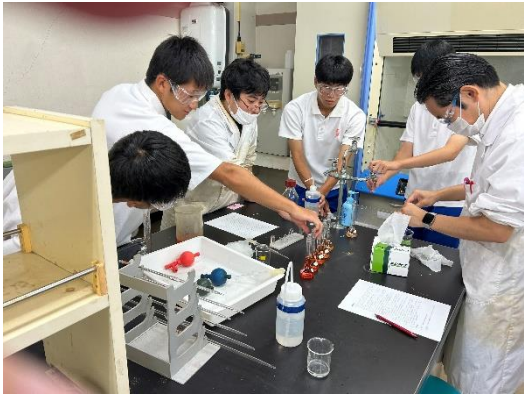
本校理数科からは秋田大学や秋田県立大学へ進学する生徒が多い。今年度は昨年度までよりも両大学と連携を取ることで、生徒たちの興味・関心をもつこと、大学で講義や実験を行うことでより専門的な知識や技能をもつことを目的に1年間活動した。

1) サイエンスラボツアー（9月5日～7日）

9月5日には秋田県立大学秋田キャンパスに2年理数科35名が参加し、午前には生物資源科学部応用生物科学科 牟田口祐太 助教 による 模擬講義『D-アミノ酸のバイオケミストリー』を受講した。D-アミノ酸は、食品や生体内にも存在し、生物にとって重要な物質だが、研究の歴史が浅く、今後新たな発見・研究成果と医療分野への応用が期待できる分野です。教科書には載っていない最先端の研究に、生徒は熱心に耳を傾けていた。午後は牟田口研究室および秋田キャンパスを見学した。学科ごとにまとまったキャンパスであり、設備等含め実験室などの光景を見ることができた。偶然卒業生と昼休みに会うことができ元気な姿を見ることができたのも良かった。



6日には秋田大学理工学研究科に2年理数科33名が参加し、4つのコースに分かれ講義・実験を行った。応用化学コース 齊藤 寛治 助教 による実験・講義「蛍光ペンの色素を作ってみよう」、小笠原 正剛 准教授 による実験・講義「水道水中の鉄の定量に関する実験」、材料理工学コース 長谷川 崇 准教授 による実験・講義「情報記録されたカードの磁区を観察してみよう」、数理科学コース 山村 明弘 教授による観察・実験「花と野菜に見出すフィボナッチ数」と数学・物理・化学・生物の知識を活用し、実験・観察を体験することができた。午後は学部説明があり、生徒も関心をもって説明を聴いていた。県立大学とは違った雰囲気のカンパスを見学でき良い経験となった。



蛍光ペンの色素づくり



鉄の定量実験



磁区について講義



フィボナッチ数の観察

7日には秋田県立大学本荘キャンパスに2年理数科33名が参加し、機械工学科 境 英一 准教授 による「100%天然由来のプラスチック複合材料をつくろう」、知能メカトロニクス学科 齋藤 敬 教授 による「高校生のためのロボット開発演習」、知能メカトロニクス学科 伊藤 亮 准教授 による「高校生のための人工知能開発演習」の講義・実権を3コースに分かれて行った。工学系の内容を高校生でもわかりやすい内容であり、実習にも意欲的に取り組んでいた。



プラスチックに関する講義



ロボット開発演習



人工知能開発演習

3日間にわたり、大学で講義・実験を体験できたこと、それぞれのキャンパスを見学して雰囲気を味わうことができたことなど収穫が大きかった。来年度も普通科のインターンシップ期間中（9月）に実施することを計画している。

2）秋田県立大学システム科学技術学部の各学科の講義受講について

理数探究の研究発表が終わる11月以降に秋田県立大学本荘キャンパスに行き、各学科100分間（13時20分～15時）の講義を受講している。本校から徒歩で移動できるという利点を利用し、また地元の大学に興味をもってもらいたいという趣旨で行っている。

実施日	担当学科・担当者
令和5年12月7日（木）	情報工学科 光澤 敦 教授 ※ 天候不良のため中止
令和5年12月14日（木）	経営システム工学科 木村 寛 教授 （1年生 13：00～15：30） 建築環境システム学科 込山 敦司 准教授 （2年生）
令和6年1月18日（木）	経営システム工学科 松原 佳亮 准教授

令和6年 2月 8日 (木)	機械工学科 高橋 武彦 准教授
令和6年 3月14日 (木)	知能メカトロニクス学科 能勢 敏明 教授

昨年度までは1年生の理数科希望者にも実施していたが、内容の精選を行い、今年度は前述のように統計学の講義だけ行い、2年生の理数探究の班編成を少しでも早い時期に編成し、テーマ設定をして実験の時間を増やすことを考えている。なお、学部説明を2月13日(火)5～7工事に実施する予定である。

3) 医師による講演会について

11月20日(月)に市立秋田総合病院消化器外科 大腸外科長 陳 開 先生による講演会を行った。1年生の理数科希望者・2年理数科全員・3年理数科医療・看護系進学希望者約70名を対象とした。ロボットを利用した腹腔鏡手術は医療の最先端で、生徒にとっても興味深い内容であった。特に今までは医師4名で腹腔鏡手術の装置を使っていたが、ロボットだと1台で動きも安定して、患部を的確な操作で治療できる利点があることで便利である。その一方で、装置に感覚を感知する装置がないので、感覚装置があるともっと発展するロボットであると話があった。また、先生の高校時代の経験も踏まえた勉強の仕方、生活の送り方についても説明があり、学力を伸ばすにはどうしなければならないのかと感ずることができた内容であった。



2. 理数探究について

1) 理数探究の秋田県立大学との連携について

今年度から新課程となり、課題研究が理数探究となった。深い探究にするため、思考力・判断力・表現力を育てるため、一部の班において、秋田県立大学の先生のご指導をいただきながら研究を行った。数学班と物理1班でシステム科学技術学部建築システム環境学科 菅野 秀人 教授、物理2班でシステム科学技術学部機械工学科 須知 成光 准教授から研究に関するアドバイスを頂いた。来年度は理数科希望者を1月から班を分け、少しでも早期にテーマ設定を行い、大学との連携を深めていきたいと考えている。

また12月14日(木)5~7校時を利用して、システム科学技術学部経営システム工学科 木村 寛 教授から「データの取り方と統計の読み方」について、高校生でもわかりやすい内容で講義を行った。実験する上ではデータを取り、統計処理をすることも重要な要素なので、今年度から導入したが、生徒にとっても統計の大切さを知ることができて有益な時間となった。



講義の様子

2) 各種発表について

今年度は化学班・生物2班が齋藤憲三・山崎禎一顕彰会の研究助成をいただき、1年間実験を行った。

11月13・14日(月・火) 理数科合同研修会

11月15日(水) 課題研究発表会(カダーレ)

11月25日(土) 秋田県小中高理科研究発表大会

で各班または代表班で発表を行った。今後の課題としては総合型選抜に向けたプレゼン力をつけるためにも、外部への発表の機会を増やしたいと考えている。

3. 今後の課題

本校は全県で6校しかない理数科設置校である。秋田大学や秋田県立大学を中心に進学希望の生徒をいかに伸ばし、実験・観察の技能や思考力・判断力・表現力をどのようにして身につけるか、来年度以降様々な手立てを講じていきたい。

今年度国際科の取り組み

国際科運営委員会・斎藤孝輔

本校は今年度共学化 17 年目を迎え、国際科は現 3 年 E 組の生徒が 15 期生という節目の年となった。新型コロナウイルス感染症の五類引き下げもあり、学科の大きな特色である台湾への修学旅行が 4 年ぶりに実施された。英語科職員の異動が大きかったこともあり、当委員会の委員も大きく入れ替わった。

従来の取り組みを継続しつつ、新たな試みも取り入れた今年度を振り返りたい。

1 主に現 2 年生を対象とした取り組み

(1) 秋田の企業を知る&うちわ制作講座

8 月 31 日 (木) 3・4 校時に、秋田キャッスルホテル社員を講師に迎えて、2 年 E 組全員を対象に行われた。

SDGs の視点から、地元企業の取り組みや地域活性化について考え、また外国人客の接遇の経験談から、異文化理解について考える契機とした。秋田杉の廃材を実際に利用してうちわを制作し、修学旅行先への土産とすることができた。



(2) 由利高グローバルチャレンジ

9 月 5 日 (火) から 7 日 (木) までの 3 日間にわたって行われた。

昨年度まで本校は 4 年間、県教委「AKITA グローバルネットワーク事業」の指定校として、外部講師によるワークショップ、県内施設等訪問、英語ディベート等の活動を積み重ね、年度末に県内他校とオンライン交流を行ってきた。

今年度、本校は「AKITA グローバル人材育成事業」の指定校 4 校の一つになり、その柱として計画、実施した。

国際事情の専門家による講演、ワークショップ等の活動を通じて、国際社会への視野を広げ、課題研究や修学旅行を充実させ、進路実現にも活かすことをねらいとした。

外部講師による活動は以下のとおりである。

1 日目

- ・株式会社アイエスエイによる、海外留学や異文化理解に関する講演
(1 年生全員と 3 年 E 組の一部も聴講)

2 日目

- ・大学教員による台湾講座
- ・NPO 法人による、SDGs についてのワークショップ

3 日目

- ・県国連協会による、SDGs についての講演

1 日目は、講師の留学経験、それらを通して学んだこと、異文化に接する際の留意点など、豊富な経験に基づく講話を聞く中で、在校生がこれから様々なことに挑戦する励みになった。

2 日目は、コロナ禍前に毎年来校していた講師による講座で、修学旅行前に台湾の歴史や地域事情などを学び、準備や学校訪問に役立った。

2 日目と 3 日目の SDGs に関する学習活動では、SDGs の意義、近年の気候変動のデータなどが紹介され、環境保全などのために身近にできることを考え、今すぐにでもできることから実行することの大切さを学んだ。グループワークを通じて討論の手法やルールを理解し、自らの意見を間違いを恐れずに述べることの重要性を学んだ。

なお、2 月 9 日 (金) 午後に、指定校 4 校間のオンライン交流を予定している。



株式会社アイエスエイによる講演



NPO 法人によるワークショップ

(3) 自己肯定感の重要性を学ぶ授業

11月9日(木)3・4校時に、ユニリーバ社員及び、岩手県在住のガールスカウトのスタッフを講師に迎えて、2年E組全員を対象に行われた。

修学旅行から帰国直後の、異文化理解を深めた経験が新鮮な時期の講座であった。様々なアクティビティを交えながら、自己肯定感について考えることで他者の存在や違いを受け入れ、共生社会を築く一員として成長を促すことを目標にした。



(4) 課題研究

例年どおり、6班編成、6名の教科担任(英語科2名、地歴公民科4名)により行った。今年度の研究内容は以下のとおりである。

- ・日本語ディベート(電子監視制度の研究)
- ・民謡部を広げよう(ICTによる本校の広報)
- ・異文化理解
- ・学生のストレスについて
- ・自分らしく生きたい(ジェンダー研究)
- ・地産地消(県内企業訪問も交えながら)

修学旅行前の科内発表を受け、11月にカダーレで行われた発表会で、日本語ディベート、学生のストレスについて、自分らしく生きたい、以上の研究班が成果を披露した。うち後者2班が、2月のAKITAグローバル人材育成事業のオンライン交流で、研究内容を英文で発表する予定である。

2 主に現1年生を対象とした取り組み

(1) 学科選択指導

1年部、進路指導部の計画に沿い、例年どおり総合的な探究の時間やLHRを中心に行った。

今年度は理数科ともに、学科主任が1年部に入っていたため、学年部は勿論、例年以上に学科間の共通理解を深めた上で指導にあたった。

国際科の場合、「英語」を学ぶ学科という意識が生徒、保護者ともに強い傾向にある。しかし、国際科は英語科ではない。実際、選択によっては週の英語の授業時数で、普通科の方が国際科を上回ることもある。また、教科のバランスが悪く、他教科の成績が振るわないため、折角の英語力を進路実現に活かさない卒業生も実際に存在した。

そこで、国際科は英語科ではないこと(=英語は他学科より少し多く学ぶこと)、英語は勿論だが、文理融合の視点で各科目バランスよく学習することの重要性を繰り返し指導した。

夏休み前の予備調査では人気が低調だったが、学年全体が定員割れの中、最終的に37名で新年度を迎えることになった。

なお、2月末に、県内在住の国際科卒業生による講話を計画している。

(2) 学科別活動

例年どおり学科決定後、総合的な探究の時間やLHRを中心に始めている。

今年度は理数科とともに、本校の図書館司書による文献調査のポイント講座をお願いした。年々活字離れが進み、紙媒体を用いた粘り強い学習が苦手な生徒、また、家庭で新聞を購読していない生徒が増えている。当日は図書館の新聞を提示してもらったところ、生徒は新鮮に感じ、幅広い手段で情報収集することの重要性を学んでいた。

また、理数科とともに班編成を年度内の早い時期に決定後、プレ課題研究の準備を始めている。

3 次年度以降に向けて

(1) 委員会組織

担任や副担任となる学級に関わらず、英語と地歴公民科職員全員が委員になることを提案する。

今年度の委員は英語科4名、地歴公民科1名である。国際交流など英語科の力がとくに必要な場面、地歴公民科主体の課題研究など現状を踏まえ、校務分掌で検討していただければ幸いである。

(2) 学科選択指導と進路指導

国際科の魅力を伝える(海外修学旅行、第二外国語等)とともに、まず優先すべきは日常の授業への取り組み、規律ある学校生活であることの指導が必要である。楽しいだけの学校生活では生徒に真の力を付けさせることは難しい。

国際科においては、文系大学合格に対応できる指導を展開しつつ、一方で希望進路の多様化から就職などにも個別に対応していくのが、過去の担任経験からも現実的であると判断する。「孟母三遷」、周囲の環境が学習へ与える影響は大きい。高い志を抱いて、国際科を自ら積極的に選択するような指導を、今後も継続したい。

(3) 課題研究

学科決定後、今年度のように早期に班編成に入り、1年次にプレ課題研究を始めることを毎年継続したい。特に日本語ディベート班は、1年生の2月に新年度の大会論題が発表され、2年生の7月上旬に大会を迎えることもあり、尚更である。

2年次の課題研究担当者だが、ここ数年英語科

の一人あたり持ち時数が、他教科に比べて多くなっている。教務部で検討されている 50 分授業への移行と合わせ、各教科のバランスを加味して現行の割当てでよいのか、今後検討が必要である。

（４）各種行事

現 1・2 年生は、中学校時代にコロナ禍を経験し、以前ならば経験できたことが未経験のまま入学した生徒も多い。現中学校 3 年生もその影響は続くことが予想される。学校生活に刺激を与え、自己理解・他者理解を深めながら成長を促す意味でも、国際科独自の行事の教育的意義は大きい。

グローバルチャレンジのような、今年度初めての試みもあったが、各方面の協力を得てここまで無事行うことができた。今年度の成果を踏まえ、改善点を次年度に活かしていきたい。

時期について、グローバルチャレンジは今年度と同様、9 月が望ましい。普通科インターンシップや理数科ラボツアーと日程を揃えることで、学年全体の進路意識の高揚を図るとともに、修学旅行準備を円滑にし、他学年の授業との調整もしやすくなる。卒業生講話は、大学の学事暦や 1 年生へ刺激を与える観点から、2 月後半が適切である。

一方で、行事の過多によって生徒や教職員の多忙感が逆に増す結果になることや、授業を必要以上に潰すことには慎重を期さなければならない。

漫画『美味しんぼ』の主人公・山岡士郎の台詞に、以下のものがある。

「どんなに素晴らしいレストランでも、一週間通えばウンザリするけれど、ちゃんとした家庭のお惣菜は、毎日食べ続けても飽きないよね。」

時代が変わっても、授業と基本的な生活習慣の確立が、高校生活の土台であることに変わりはない。すべての分掌、学年、教科において、授業を柱とした日々の地道な積み重ねによって、土台をしっかりと固め、節目節目の行事で刺激と潤いを与えながら成長を促す、このバランスを大切にしたいものである。

編 集 後 記

多くの先生方の御協力により令和5年度『研究紀要』を刊行することができました。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけがこの5月から5類に移行し、授業や学校行事など、学校現場も以前のような活況を取り戻しつつあります。タブレットや電子黒板のある授業風景はすでに日常となり、「思考・判断・表現」や「主体性」を育む授業実践など授業改善の取組は、より一層広がってきていると言えます。

全学年で新学習指導要領が全面実施となる令和6年度以降、時代に相応した授業実践等のための教員研修はますます重要になると思われます。教職員の資質向上につながる取組、何より、生徒の力をひきだす取組を、教職員の共通理解を図りながら進めていきたいと思っています。

年末年始のお忙しい中御寄稿下さいました先生方、さまざまな形で編集に御協力下さいました皆様に、心より御礼申し上げます。これらの研修を今後も継続し、より一層、指導力の向上に努めていきたいと思います。

教務部（研修担当）